

縦二十二センチ、横十五センチ四ミリの半紙判の三巻の草稿。上卷本文四十丁。中卷四十五丁。下卷十九丁。弘化元年（一八四四）郷里伊勢で書いている。天保七年、十九歳のときの四國八十八ヶ所靈場參拜紀行。句讀點と濁點、平假名のルビ及びカッコ内の正誤は校訂者である。

文部省史料館藏

四國遍路道中雜誌（卷之一）

五十瀬 松浦 弘著

年來遍路の希い

兼而阿讃土豫の地は、弘法大師の遺跡多くして靈驗威徳著しきと聞しかば、何時かは烏藤を曳て八十八ヶ所え靈場を遍路し奉らんことを希といへども、世の營に促るゝまゝ空く光陰を送ること茲に年有しが、何時かは佛縁にも班らましを思ふ時から、

天保七 丙 申 余年十九 山陽之地ニ遊歴（歴）し、播備之兩州を経て下津井の湊 備中之國兒島に

船を求て 海上七り、船賃（賃）七十貳文、 渡海し、 莎笠 奉遍路四國八十八ヶ所南無大師遍照金剛并四句之切手錢十三文、毎夜出船有

書、二人ならば三人と 札挾〔挾〕 南無大師遍照金剛其字を兩脇ニ書、中行奉遍禮（路）四國八十八ヶ所同行何書こと此地の法也。 札所并ニ接待（待）所并宿屋等ニ而は此札一枚ヅ、を皆置こと也。此國に而

菅笠の書法 札挾の書法 七度廻りしは赤紙札 十四度より青紙札 十八度より黄紙札 二十一度よりは杖 白札 十八度より黄紙札 廿一度より上は皆文字なしの白札 杉の木にて角ニ削る。上の方を五度より青紙納、十八度より黄紙札、其威徳不思議有しことは追々卷中ニしるす故にこゝに略す。 杖 輪ニ削（彫）、 何れも丸の五

三百八十餘里の道程

字を四面にしるし置也。杖のことに身をやつして、遍路の順程を聊因ある信者にも見せばや、又は丁字の辨なき婆子にも見せまほしく覺え候儘ニ、一小冊を懷にして日々の順路、村名、里程をしるし、又は堂塔、坊舎多き靈場は其境内ニ山色風光を審にして、一度此書を開るものは座ながらにして三百八十餘里の阿州四十八丁道五十七里、讃岐三十六丁道三十四里半、豫州百九里半、土州五十丁道九十四里半。長程を歩ミ、八十八ヶ所之靈場に法縁を結ばしめ、大師創業時の志給ふ苦辛を感じて、一度にせよ南無大師遍照金剛の稱名を誦せりしこと、今淨書して置んと禿筆を始む。然れども其文様些も潤色加ふる時は實を失ひ、興を誤こと多ければ、只筆記のまゝを假名もて見やすからんが爲にしるす。扱卷中月日のことは是また贅物たりしかばしるさず。只簡ならんことを主とすればなるべし。

丸龜

丸龜

讃州那珂郡城主京極佐渡守。此城慶長年間より生駒家在せしが事有而、寛永十八年より山崎甲斐守是ニ住し、其後萬治元年より京極家住す。城下市町一萬餘軒。繁華の湊なり。是より多度津貳り。金毘羅山金鳥井(居)に(より)百五十丁、又札所に直ニ行時は七十八番宇多津の道場寺へ三十丁也。然れども先元來余も信仰のことなりしかば、是より象頭山に參詣を致しける。

遍路に魚類を賣らず
御遍路様とて尊崇する
上遍路
中遍路

○扱四國遍路の輩は此地の風ニ而魚類を賣ことをせず。また御遍路様とて至極尊崇すること也。また此地ニ而は日々人の門口ニ立而、一手一錢の功德をうけて廻るものを上遍路と云ひ、左もせて廻るものを中遍路

下遍路

三ヶ月五ヶ月も懸る

船上り切手

と號、合力を連是ニ荷物を負ハせて歩行を下遍路と云る也。其故信心之輩は皆首ニ頭陀を懸、札挾に笠杖を装ひ、一手一錢の合力を受けて廻るが故に、四百里ニ不滿道なれども三十日、五十日かゝりて廻るものわなく、皆三ヶ月も懸ること也。故此四國の内ニ而頓死、病死等ニ而も有而は、其所の例を受べき手形を持、別て此丸龜ニ而船上り切手と云るものをもらひ行ことなり。其切手は上陸の上問屋ニ行而、船改所ニ國元の寺、往來を書認めもらふこと也。右之代錢八十五文也。此船揚りを持たざるものは、土州甲の浦の番所等ニ而甚陸ヶ敷云て通さること也。故ニ遍路の衆は皆失念なく此湊ニ而揚り切手を取行かるべし。

とき川

○此處より宇多津へ行には城下を出て少し南ニ出れば

とき川

と云有。此川より西は丸龜領にして、東は高松領なり。是より東は鹽濱多し。また北ニ

權堀光明庵

權堀光明庵といへる有

本尊阿彌陀如來。道隆寺よりは半り東也。多度津街道より右の方、法然上人の權をもて堀給ひしと。其跡ニ清水涌出るなり。

詠歌

南無といふ阿彌陀の權と(で)ほる清水

何時の世までも佛々とわく

綿畑多し

と有。聊かの道場なれども元祖上人廿五靈場順拜の輩は、皆こゝに札を納めて行るなり。此邊り綿畑多し。土地至極肥沃にして農家富り。又城下より西金毘羅街道を行こと一り斗にして、道より左りの方

(註3)しきない

飯野神社

式内なり。飯村ニ有。此神社の上に飯野山といへる佛飯を盛りし如き山有。小松繁茂し西行到而きれるなる山也。是を此邊りに而は讃岐富士といへるよしなり。又山の北ニ當りて

讃岐富士

三本松

といへるもの

蛙の梅

少し斗西

讃富豐の社

等いろ／＼名所古跡多し。然れども只一度二度往來をせし斗のこと故ニ、其邊りの名所古跡を審にする

ことを得せて過しこそ遺恨ニ思ひける。

さや橋

○又此街道筋在村多し。然れども其名稱を審にせて過しなり。道傍の農家の子供等往來の參詣人ニ皆錢乞て附隨ふこと甚うるさくぞ。是より二丁斗の並松を越て市町ニ入。商戸覺をならべ人家凡覺ける。百五十丁にして。金鳥居 三千軒餘と思わる。常ニ戲場有て興行す。八丁を過て

下馬石

長十貳間。橋上ニ屋を架して雨日の助とす。此處より善通寺へ五十丁。高松へ八丁。又此川ニ添て上る時は阿州三好郡箸藏寺へ行也。少しの坂を上りて札守をうる。當所の土産物を商賣(賣)處有。又嶮き坂を少し上り右 地藏堂 井 普門院 道より左 鼓樓 傍 下馬石 有。此處より市中を望時は眺望甚よろしくして珍敷地也。又此處に館をうる店多し。皆大傘をもて日覆 二王門 入て左の方簾有。お屋しきと云。石燈籠並び建た 石鳥居 入て右の方 金光院 此とす。右の方慈光院、萬福院、高勝院、神護院過て 別當所有

逆木の門

ニ而御守をうる。壹匁貳分より拾貳匁、百貳十匁、壹貫貳百匁等有と。此札のこ 神廬 井 茶所 向 多とに而は奇怪(あやし)き話しも有ども、いづれも浮屠(註4)の忘(忘)説にしてしるすニたえず。 寶塔 石階を越 本尊十一面觀音。左りの方山 手水池 右へ上を 二天門 此門を逆木の門とも云 實塔 正面 金堂 の崖ニ當時普請ニ付勸進所 上れば 大行真堂 又 毘沙 遣ひしと。長曾壁(我部)宮内少輔元親の建立なるよ 本地堂 石階少(えんのせうじや) 又 大行真堂 又 毘沙 入て駒犬。鳥居。燈籠有。御手洗川渡りて向 門摩利支天堂 等有。金鳥居 等を潜り、向て

象頭山金毘羅大權現

象頭山金毘羅大權現

祭神金山彦尊。此山の形象は則象の伏たる故ニ號るとかや。松尾寺と稱し社領は三百三十三石。國主高松侯より寄附せらる。宮殿善盡し美盡し、柱梁皆龍蛇麟鳳

十二景

を彫て朱塗錦帳實に目を驚かせり。此處より左右を眺望せば丸龜湊ニ出入の船眼ニ歸するが如く、鹽飽七島、小豆島皆審ニ見るニ足れり。又當所の十二景とて、裏谷の遊鹿、雲井洪鐘、前池濯(濯)魚、左右樓陳、橋樓復道、後前竹園、石淵新浴、五百長市、君(群)嶺松雪、滿濃曲流、箸洗清漣、幽軒梅月等審ニ見るニ足り、又うらの方へ廻れば蠟石の燈籠等有。并て

三十番神社 下の少 經藏 下の 金剛坊觀音 并 繪馬殿 并 彌陀堂 又并 孔雀明王堂 并 籠堂 次 唐金の馬 向 神輿舍 石階 三十 大黑天堂 等なり。其餘坊舍堂塔多しといへども其大概をしるす。奥の院といへるものは是より六りにして、阿州三好郡箸藏谷に有

宇多津村
海邊は皆鹽濱當
國第一番の產物

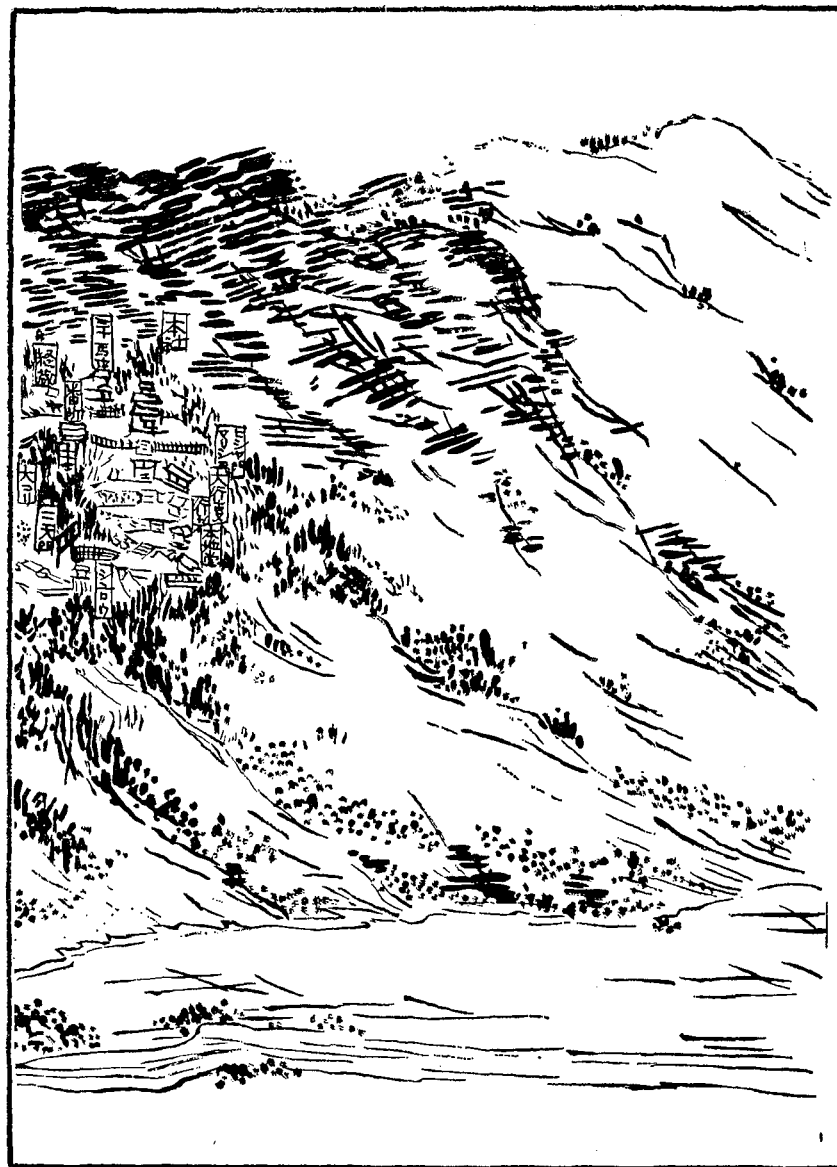
丸龜より東の方高松との 宇多津村 鵜(鵜)足郡宇多津濱。町家凡五六百軒。半は農家、漁家、鹽濱稼等也。商戸又船頭家業のものも有。甚繁華の地なり。此邊り海邊は皆鹽濱にして當國第一番之產物也。村中少し高きに靠、石階五六十級登り

七十八番道場寺

七十八番佛光山道場寺

從ニ丸龜三十丁。從道隆寺一壹り半。少しの高ミにして眺望甚よろし。本尊は座像の彌陀如來。弘法大師之御作なり。御丈一尺八寸。

詠歌 おどりはね念佛まうす道場寺



象頭山眺望之圖



拍子をそろえ鉦を打なり

境内 井 等有。此うし 青の山 といへり。また此處よ 佐見島 といふ也。利現大師 大師堂 庚申堂 ろの山をば 青の山 といふ也。利現大師 御誕生の島なりと。

佐見島 古歌に さミしまやましに通ふ海士お（小）船

片帆ニ入るゝおももの山風

奥院屈藥師

町より廿丁 正通寺 本尊は沖より出現の藥師如來なり。本堂の傍ニ 奥院屈藥師 といへるもの有。此傍な 斗も行て 利現大師堂、聖寶尊師建立なり。又三丁上り る山に四國八十八ヶ所之

坂出村

石像を安置す。山皆小 農家のミ也。此邊甘諸を 北西庄村 農家斗。茶店は札所 松にして風景よろし 多く作る。野道少し過て の前ニ一貳軒有。

七十九番摩尼珠院 崇徳天皇崩御の地

七十九番金花山摩尼珠院

俗ニ崇徳天皇と云り。從ニ宇多津一り半。河野郡也。此處は則崇徳天皇崩御ま 寺と云。本尊十一面觀音。立像にして空海自作なり。御丈二尺三寸。 しくて棺ニ入奉り、しばらくこゝえ置まるらせし古跡なりと。寺ハ妙成就

詠歌 上洛のうき世の中を案ず（たづぬ）べし

天皇さえもさすらへぞする

又并 大師堂 傍 門を出て寺 八十はの清水 其因縁如何なる事やらん、審ニせざれども何れ院 鎮守の社 のうらニ になミ有ことと思わる。當國第一の清水也。少

鼓が岡

し傍 城山の社 此處 鼓（鼓）が岡 といへり。天皇行宮の古跡にして當國の 加茂村 農家斗也。少し 式内也と。また畑道を少し行川有。越て の坂有。越て

八十番千手院國分寺

八十番白牛山千手院國分寺

從ニ七十九番一り半。河野郡。國分寺村ニ有。此村農家のミ。札所の前ニ 茶店二戸有のミ也。當山開基は聖武帝一國一寺之國分寺を建立し給ひし 其寺也。本尊は千手觀音の由。像御丈二丈六尺。行基菩薩の作也。

詠歌 國を分野山をしのぎ寺々に

まゐれる人をたすけまし（ませ）

境内樹木老繁りて到而 大師堂 井 等有。又寺を出て少し斗西 光明皇后の 物寂たる處なり。傍 鎮守の社 の方ニ出、瀧の宮に行には 建立也。 三谷世尊

大寺也。是より 大野修理卿塚 少し斗 井 六妻山 五色梅 又 正花寺 秦氏の 建立。 平家が池 又 鴨社 又うらの方に 隔て

又 石舟 又 十分寺 等有也。何れも如何なる縁因やらん、分明にせざれども土俗云傳ふまゝ ことしるし置ものなり。しばらく行て瀧の宮、百貳三十軒の町也。

瀧宮龍燈院

國府別當瀧宮龍燈院 從ニ國分寺三り。又金毘羅よりも三り。本社（牛）頭天王。菅卿の御舊跡也。社 内ニ大師堂、藥師堂、十二社宮有。其社地谷川に枕（のせ）みて風色よろし。祭禮は六月

まん（の）の池

ニ有。余も其時ニ行たりしが何日なりしか忘却しぬ。開基は行基菩薩。天平寶字年中のよし也。又是より壹 里斗山 池の宮 式内の神社なりと。則弘法大師作り給ふまんのう（の）の池といへるもの有。周り凡 二入て 二十七八丁も有べし。又是より東大川嶽といへる高山有。則河（阿）州境也。

高屋の大師

又 國分寺より下道通りをば白 大やぶ村 井 村中 遍照院 高屋の大師といへり。大師 天皇社 峯へ行には畑道少し行て 自作の尊像有。少し行て



勅額縮圖



遍路坂

院の行宮なりし(と) 春日の社 等有。是より松原を少し通り坂ニかゝる也。惣而此道が本 不動瀧 是は往
かや。并て少し北ニ 通りなりしかや。少し岩道の九折を上り、道より左リニ 來より
は見えがたし。寺ニ到りてより門の傍を少し入れば見ゆ。 大門跡 并 中門跡 右の方ニは眞藏院。茶店。表
此上ニ小き不動堂有。少し上り下馬石。下乗石。越て 門跡 門を入て茶接待(待)所。何れ
も前ニ圖せば一 又 國分寺よりし 遍路坂 道よろし。坂中下馬石、
一はしるさず。 又 直ニ上らば 下乗石等有。越て

神谷神(社) 少し道より 賴朝塚 うしろ 堪空上人塔 并 廿八塚延喜地藏 つゞきて寶積院。
左リ山ニ入 の方に 一乘院等。越て

八十一番白峯寺

八十一番綾松山洞林院白峯寺

從國分寺裏道遍路坂を上らば五十丁。表門通り高屋より上らば二り斗 有。其内坂は十八丁也。此山青海村分也。寺領三百三十石。高松より
附る。大師開基にして南天竺補陀落山より來る靈木を以て、御長(子)三三三寸の千手觀音の立像を作り給ふ。

詠歌 霜さむく露白たえの寺のうち

御名をとのふる法のりのこゑこゑ

傍 大師堂 并 九社權現 并 善女龍王社 石階二十餘 彌山三社 此處は七ツ過ては人 寶庫 天皇御在
ニ 大師堂 并 九社權現 并 善女龍王社 石階二十餘 彌山三社 此處は七ツ過ては人 寶庫 世の時の

もの有と聞り。 諸神勸請塔 并 千佛塔 下 行者堂 并 金堂 此うらの 馬ヶ嶽 と云。嶮敷屋 勅願門
又少し北ニ 諸神勸請塔 并 千佛塔 下 行者堂 并 金堂 此うらの 馬ヶ嶽 有。又下りて

前ニ圖する處の額を掛、左右ニは六郎判官爲義、八郎爲朝乃木像を安置す。又門の前ニは鐘樓、十王堂、手

崇徳陵

水鉢等有。入ては左近の櫻、右近の橘、傍ニ西行法師の像有。御供所、拜殿、何れも美を盡せり。正面
向て右の方六郎判官爲義を安置、左りは八郎爲朝を置り。綠樹陰森として甚物寂たること誰豈人
落涙せざるものなかるべし。

山陵志

崇徳陵在讃岐國阿野郡之白峯寺白峯寺縁起ニ山陵所レ在是其寺西北隅ト云其寺西北隅今檢之孤
記紹運記墳據岩壁之上、封土高八尺石牆以環之其前有廟安帝遺像以奉祀焉又右有母后廟待賢門院
藤原氏右在ニ
山神廟讚岐守源公世能致堂宇之修嚴然可畏敬一略

兒ヶ嶽

陸(陵)の相摸坊堂并觀音堂等又此陸兒ヶ嶽といふて千萬仞の崖なり。備前、小豆島并鹽飽
東に并て〔陵〕の下を七島等を眺望して甚風景よろし。前の方へ□る

ニ方丈、臺處何れも美を盡し、前ニ圖するがごとし。

水無瀬前中納言慈音入道當山ニ詣て、

世をのがれ四國あるくころ

崇徳帝の御遺跡に拜奉りて御階の櫻立花〔橋〕を見て、

この殿の御階櫻立花に

我も昔のしのばれぞする

綾松山ニ舍利會ニ侍りけるに松風のきこえける序

崇徳帝の事思奉りて、

古寺のものとな□して君ませば

こゝも雲井の庭の松風

崇徳帝の陸(陵)に詣けるニ、あまり袖のへつるゝを見てよみて奉る。

袖の上にあるし色香は君やしる

身は墨染のやつれはつるゝ

此餘古歌多きよしなれども略しぬ。さ

池ノ宮 松山の 関加井 道より左り成就寺、下乗石、下馬石、越て
中ニ有 追分有。左り根香寺。右國分寺。是より山

の峯つたゐまた羊

南是ヶ峯清水庵

腸等を三十丁行て

本尊不動明王。へんろいたわりの爲ニ立らる。傍ニ足尾明神の社。藏
王權現社。又庵の少し西の方ニ岩間より清水流出る故ニ此庵の名とす。

此間夏は暑嚴處、冬は海風強處故ニ、此庵を立て往來の人をいたわり給ふ。二十丁行て

八十二番青峰山千手院根香寺

從ニ白峯寺二十丁。皆山道也。開山高□大師。本尊は立像の千手觀音。
御長三尺八寸なりと。後智證大師此地ニ來りてしばらく寂〔錫カ〕し給ひ

八十二番根香寺

しとかや。

詠歌 宵の間のたえふるしものきえぬれば

跡こそかねのごんぎ(や)うの聲

又境

大師堂

并 五大力菩薩堂

又 鎮守社

等有。方丈、經堂有。皆無檀地のよしに而物寂た

香西浦

人

内ニ

凡千軒も有べし。農家、漁家入接。綿并粉類を製す。少しの船間〔潤〕も有て隨分繁華の場所にして、商戸多

有の地なり。田畑の中道少し行、岩瀬水八幡、大天神等皆此町はしニ有。往來より參詣するニよろし。

根香寺より一ノ宮ニ直道を行ば香西へはからで行也。此方へ通らば半りの廻り也。

八十三番大寶院

八十三番一ノ宮蓮花山大寶院

香川郡一ノ宮村。從三八十二番二り半。香西通り三り。

本社田村明神。祭神猿田彦尊ともいへり。又孝靈天皇皇子を祭ともいへり。神前ニ左近櫻、右近の橘等有。

神寂たる境

素波久羅大明神社 并 幸神 又 野業天神 又 若宮八幡

右の五社を祭れり。又別當所とて

神毫山蓮花院

本尊は弘法大師の作にして御長三尺五寸の聖觀音立像也。傍ニ大師堂。

詠歌 讚岐一の宮の御前ニあふぎ來て

神の心を誰かしらゆう

十三塚

是より西南の方ニ當りて

十三塚

といへる所有。塚十三并びたり。其ゆかりをしらず。又是より屋島へ直ニ行ば三り。高松に廻らば少しの廻り也。余は是より佛生山へ參詣せんと在道を行こと凡

法然寺

賜紫本山佛生山法然寺

香川郡。佛生山町とて少しの市町有。從二ノ宮壹り。淨土宗ニ而圓光大師二十五靈場第二番也。本尊彌陀三尊座像。地(寺)領三百三十石。高松侯より寄

附。

詠歌

おぼつかな誰か言けん小松とは

雲をさゝふる高松の枝

大門

の兩脇ニ池有。其傍ニ

千切の宮

といへる有。門前ニ

下馬石 并

十王堂

中門を入て二王門。石階を上り四門懸る。二尊門、來迎門、佛殿、此兩

脇は皆石牆を廻

御廟

法然上人の分骨を納め、并て龍雲院源英公、并ニ代々の木像を安置する也。

常念佛

并ニ國主高松侯の位牌を安置す。少し下りて骨堂。末寺末山の檀中より

納る處の骨を投入る。

彌陀堂

下 月見亭

等有。何れも次ニ圖することくんば審ニこゝには贅せず。方丈、書院、何れも美を盡し善を窮めて甚見事なること也。扱是より

して高松へ壹り半餘。然し貳りも

松岩山

といへる寺、城下の入口ニ有。此寺の庭中ニ弘法大師の作といへる崖の藥師有。遍路の衆は廻りてさして費程もなし。

高松

高松

香川郡。八千餘軒の城下ニ而頗る繁花の地也。市中寺院、神社多し。然れどもしるすにいとまなければ略す。前ニ小豆島見、湊口眺望到而よろしき地也。此城仙石權兵衛秀久住し、天正十八年

(註)より生駒雅樂頭一政へ被下。其後事有て寛永十九年より當家ニ賜る。

松葉燒の鹽

扱是より鹽濱道を行ことしばらく也。其鹽皆松葉燒にして至而上品也。行こと凡壹り半斗にして九折凡十

三丁上り

大師傳説

不レ喰梨

といへるもの有。大師此處へ遍路し給ひし時、山夫のとれる梨を乞給ひしニ其を奉らざりしかば、其梨即時ニ石の如くなりしと云傳ふ。實ニ岩礁道ニし而渴べき羊腸なり。三丁上り

師名號石

道の傍ニ有。二丁上りて二

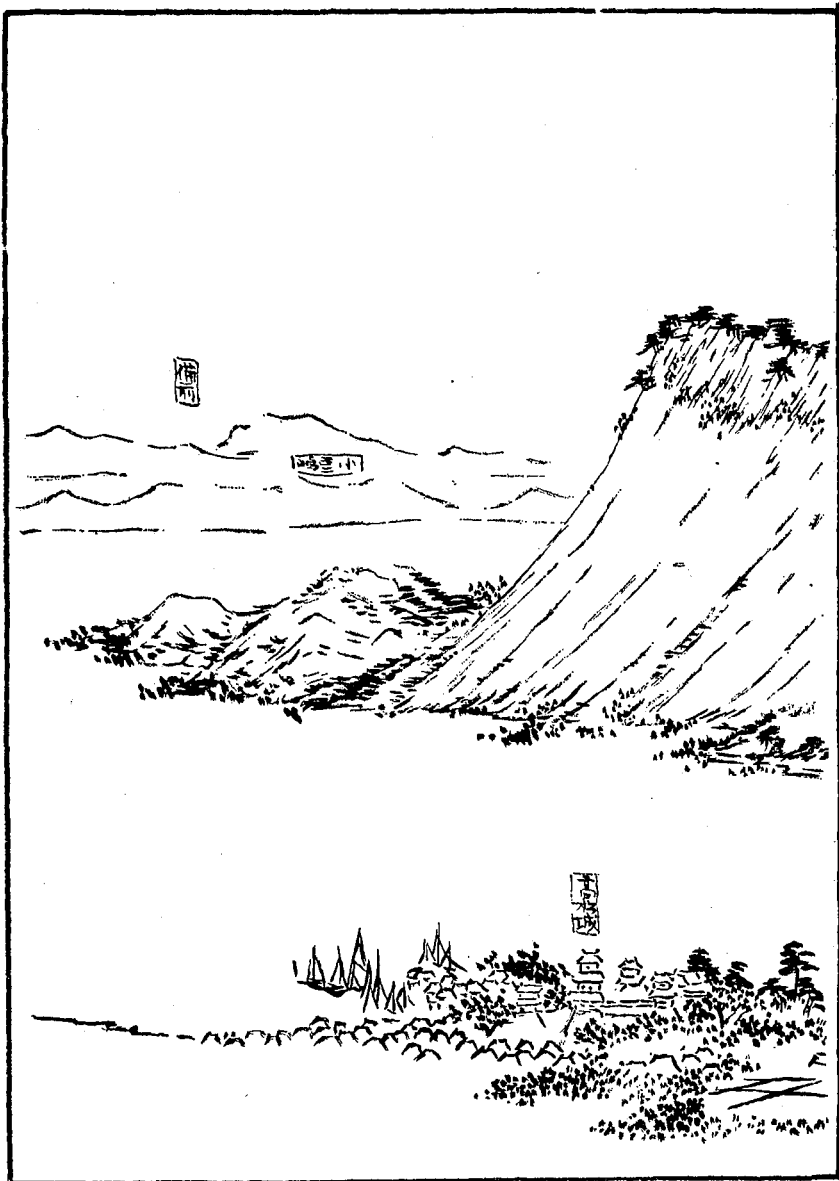
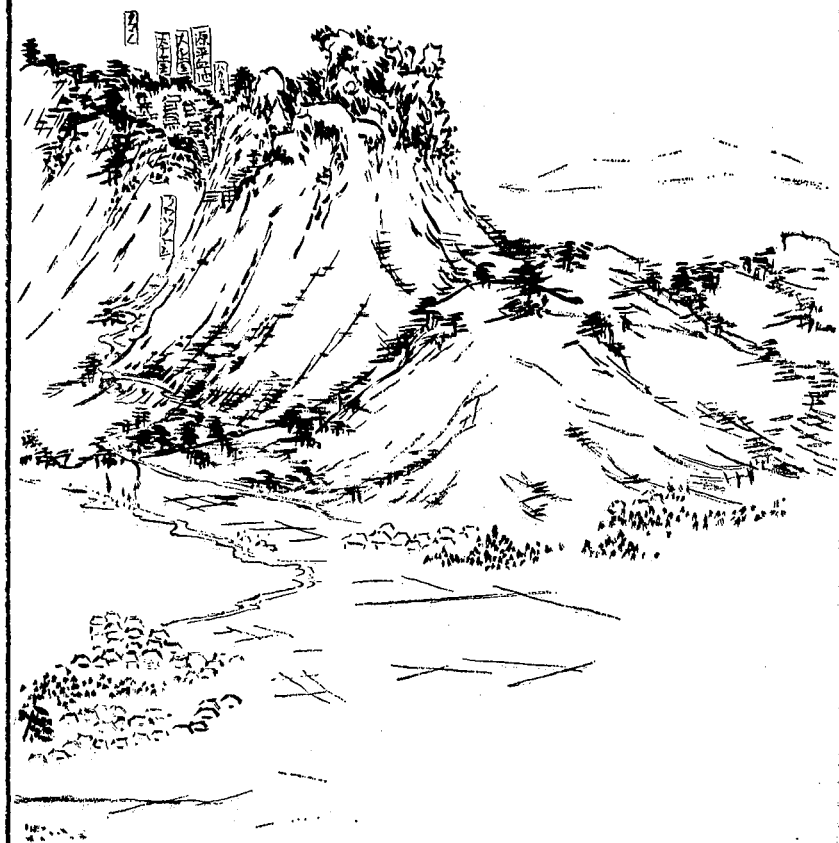
王門有。麓より十八丁。



圖



屋島寺之圖



八十四番屋島寺

從二ノ宮三リ。從高松二貳リ。山田郡なり。別當千光院南泉寺といふ。

本尊千手千眼〔眼〕觀音。弘法大師の自作らせ給ふ。又當山の縁記〔起〕といへるものに、孝德〔諡〕天皇天平寶字の比、大唐より舶來の僧鎮宗和尚といへるに勅して建立まし／＼けるとも云傳ふ。本堂の額に

遍照金剛三密行所當都率天內院管所

と勅筆様に而書たるを懸る。

詠歌 あづさ弓八島の宮ニもうでつゝ

いのりをかけていさむものゝふ

南泉寺

境内 熊野三社

拜殿等美々敷建たる社也。又二王門の前なる

南泉寺

ニは本尊弘法大師作の不動尊を安置す。境内より西眼下ニ高松の城下を眺望し、北の方ニは小豆島并ニ備前兒島郡を

源平血の池

手ニとる斗ニ見、風景言んかたなし。扱

瑠璃の池

といへるもの有。また誰が號つらん近年源平血の池といへり。過て小松原なる九折を凡十五六丁も下りて

むれ村

家接り。村中ニ

鹽濱、漁家、農佐藤次〔註11〕信忠信の墓〔註12〕

又此上の方に

瓜生山

少しの山なり。海いのり岩岸浪打際にいたり

少し斗海

駒たて岩

〔註13〕那須與市此處に駒をとめて扇の的を射たりと云傳ふ。然れども其地中ニ少しも證とするものなし。又村中ニ

洲崎寺

本尊尊聖觀音。弘法大師の作也。

此寺より源平血戰の始末書をうり出ス。皆浮屠氏之說にして見るべきものにあらず。

扱是より左リニ行ば安戸浦といへる漁浦に出て、海岸通り志度寺に行ニよろし。然し道甚廻り也。扱此村よ

八十五番八栗寺

八十五番五劔山千手院八栗寺

從二八〔尾〕島寺一壹リ。寒川郡むれ村。境内次ニ圖するがごとし。

大師傳説

大師求聞持修行之節寶劔五柄を天より下し給はりしニよつて名とし、又大師入唐以前心〔註〕ミに燒栗を八ッ程此處に植給ひ、我法世ニ興流せば此栗生ずべしと謂ひしが果而生ぜしと。其ニよつて寺號とす。

本尊千手觀音之立像。御長五尺。大師御作也と云。祭禮正月十六日なりしと云。

詠歌 煩惱を胸の智火にてやくりをば

修行者ならで誰かしらまし

女人を禁ず
廟大日

扱是より奥の院と云もの有てかたく女人を禁じ、

役行者祠 又少し
廟大日

また七ツ下りには參詣を不許。貳三丁上りて

上て

御長壹丈六尺有といへり。大師の作也。此廟に而大師

護摩修行有しとかや。是より岩角を攀 樹根にすがりて上ること貳丁斗にして彌山之禪定ニ到る。鎖にすが

りて行こと凡三十步斗

奥院

奥院藏王權現祠

則次ニ圖するごとき岩の上ニ有。扱下りて地藏堂。大師堂。本坊之傍より下ること凡十七八丁斗にして

たい村

野道少し 又川有。斗行て 大町村 越て海

志度濱

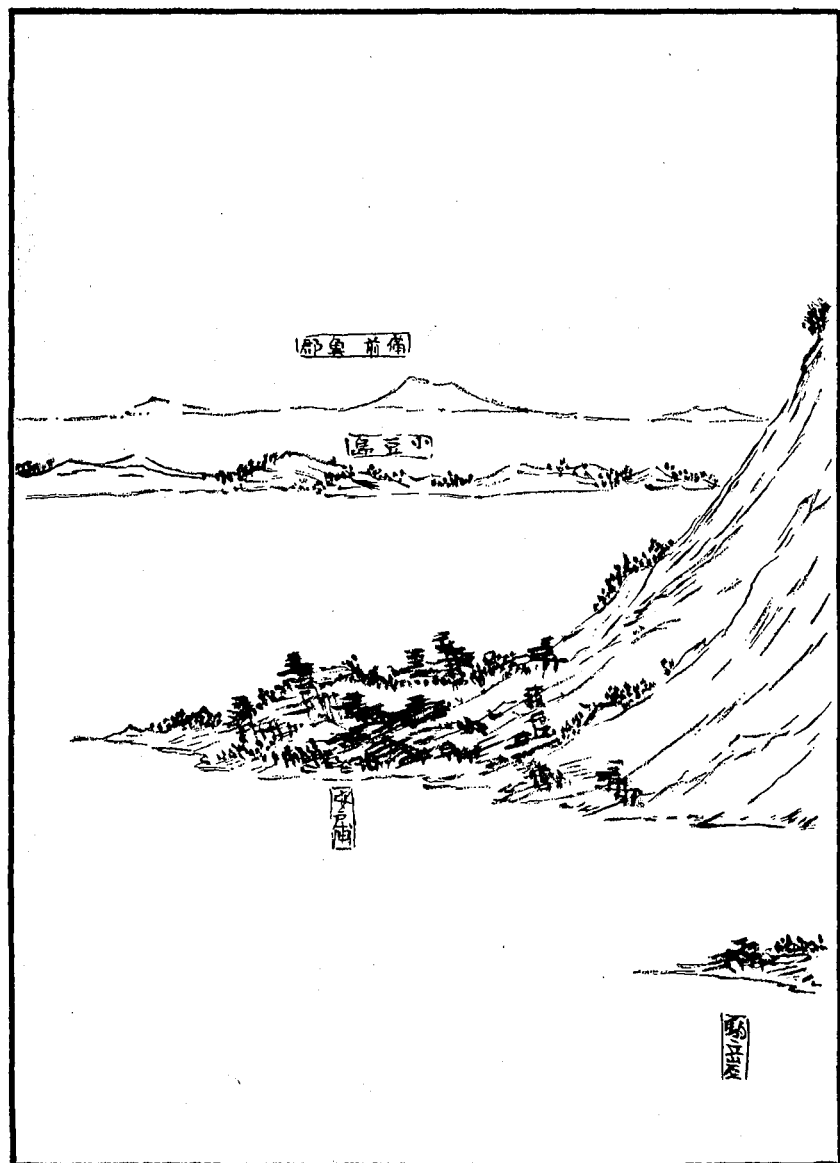
岸ニ添し

志度濱

此處人家千軒餘。舟着にして日々運送し船出入たゆること無。然し農家、商戸皆さかんなり。

二王門

門前ニ茶屋有。入て茶堂等美々敷又寺坊三ヶ寺有。向て左



五 山八栗寺圖



りの方は直ニ海岸ニ而磯馴松有。風景至而よろし。

八十六番志度寺

八十六番補陀落山清淨光院志度寺

從三十八番壹り。當寺は行基菩薩之開基にして本尊十一面觀音立像。御長五尺貳寸なりと。其後一端廢せしを大師順行之時ニ再建な

し玉ひしとかや。又或説に推古天皇之時ニ藤原朝臣某奉_レ敕て建るとも云傳ふ。

詠歌 いざさらば今宵はこゝに志度の寺

いのりの聲を耳にふれつゝ

また

十王堂 并 鎮守社

大師堂等有。扱又 奥院 といふもの有。地藏尊を祭る。又園の寺と云もの有。境内ニ 此少しうらの方に 尼寺なりと。本尊は文殊菩薩。何か觀音の由縁有よしなり。

砂糖を多く作る

此邊り砂糖を多く作れり。是より三十丁斗南

ながゆく村

又少し 斗行て

ミヤにし村

等越て長尾寺村ニ至る。少しの町家、

王門 并 茶堂 有。

八十七番長尾寺

八十七番補陀落山觀音院長尾寺

從三十八番壹り。在道斗也。此寺は聖德太子之開基なりと云傳ふ。

其後大師再興し給ひしとかや。本尊は御長三尺六寸。正觀音。聖德太子之御作なりとかや。境内大師堂。鎮守之社有。

詠歌 あし引の山鳥の尾の長尾寺

秋の夜ながに彌陀をとなへよ

長曾我部傳説

小簀が瀧

此村よりすこし山手ニ長曾我部宮内少輔晝寐の櫻と云もの有よし。土人言傳ふるに、此花如何なる日に而も花さく比は晝九ツ比ニしほるゝと云傳ふ。むかし元親四國を切隨えて此處に午睡をしられしと云傳ふかや。又是より少し北ニ當りて和爾加波神社と云もの有と聞。又長尾寺より平木と云處にかかり山ニ入に、小簀が瀧と云もの有よし。當國第一の瀑布也と聞まゝニしるし置るものなり。

扱是より遍

まえ山村 農家の

がく村

此邊り山道多し。是より少しの山ニかゝりて庵寺有。

一王門

路道を行ば

ミなり。

此處大師御修法之處なりと云傳ふ。少し山ニ上りて

并ニ茶堂、本坊、何れも物寂たる靈地なり。入て

八十八番大窪寺

八十八番醫王山遍照院大窪寺

從三十八番壹り。本尊藥師如來座像。御長三尺。當山は行基菩薩之開基なりとかや。一端荒廢せしを大師順行之比ニ再建し玉ひしとかや。

詠歌 南無藥師諸病なかれと願かけて

まゐれる人は大窪の寺

境内に大師堂、地藏堂并鎮守の

奥院 といふもの有なり。岩崖に彌陀の尊像有。則大師求聞持修行ありし處なりと云傳ふ。

社。又是より十八丁上りて山に

遍路の順路

中野村

引田へ出其より碁の浦の番所を入て、阿州牟屋〔無養カ〕の湊ニかかりて一番より順ニ打てよし。其順路は次ニしるす。然し道順は少し遠し故、遍路衆は是より十番ニ出一番迄逆ニ札を納めて、一番より十

一番藤井寺迄打もどり打こと也。然し其道は到而山道のミにして眺望もなければおも

狸合村

つゞきて

犬か

兩道ともに通る

讃州阿州の境

け村

此處茶屋貳軒斗有。庵寺有。行暮なん儀のもののは止宿するによろし。是迄讃州分也。境の峠也。少し下りて

ひかひ谷番所
入切手

ひかひ谷御番所

阿州侯より小き番所を置らる。國ニ入るものは皆此所ニ而入切手と云ものをとりて持行事也。是より山道しばらくにして十番切幡村ニ到る。八十八番より五里。何れも山道に而よろしからず。

濱通り

また濱通りをしるさば

中野村より谷つづきを
下ること三斗にして

白鳥村

大内郡なり。町家貳百軒斗。町のう
らは濱邊にして磯馴松有。町中ニ

白鳥

宮 祭神日本武尊。祭禮四月、九月八日ニ市有。近村より
群集す。一ノ鳥居、勅額門、社前ニ橋、櫻を植たり。

五社明神 井 稻荷社 井ニ神馬屋。社家四
軒。下馬札有て境内

廣く到而美麗なる處なり。又門の傍ニ鶴の宮とて鶴を置たり。

此邊濱ニ而は鹽を燒、陸に而は砂糖を製し、土地隨分豊饒の様ニ見たり。

○又志度寺より此處へ来るには、海岸通り路隨分よろし。二り半來りて津田浦。六七百軒の市町也。此邊りも鹽釜多し。半り來りて小松町。此間皆松原つゞきにして風景よろし。津田の松原とて古歌等有なり。又一り來りて白鳥浦也。貳り行て

引田

千軒の湊。出入の船多し。故ニ商戸、漁家薈を并て美々敷市町也。又此處より醬油を製す。
鹽濱多し。越て壹り斗行、逢追分有。右へ行ば逢坂越と云を至し、三番之金泉寺之うらえ

引田
醬油
逢坂越

出る也。此道は源九郎義經の越給ひしと云傳ふ。其土地を案ずるに左も有べきやに思わる。碁の浦は中々馬の蹄の立べき道なし。ひがひ谷の方は廻り道也。逢坂、番所有。是又ひかひ谷ニ同斷。出入之切手

を改む。以上讃州路三十六丁道程三十六里五丁。

碁の浦

扱是より左りへ行ば

岩角嶮路をしば
らく越て阿州分

碁の浦

此處山の厓にして右の方は數十仞の斷崖。左り之方は波浪岸へ打、一步をあやまたば粉身碎骨ニなる地

切手を改む

なり。番所有。出入之切手を改む。少しの坂を

鬼の尾村

此間壹りは頗る嶮路にして、犬もどり猿もどりと云なん所有。村ニ至る道少しよろし。

越五六軒づ、の村家數ヶ所ニ有。一り斗も行て

僻境

又田畑も有なり。此村迄は阿州分ニ懸りてより田畑少しも見ず。實ニ僻境と云もあり有里なりき。

鬼骨寺

萬臺山鬼骨寺

板野郡鬼の尾村。淨土宗にして本尊彌陀三尊。圓光大師の開基也。境内に□の木の大木十三本有。皆杉なりニ造り甚美事也。當寺因縁書に昔此處ニ鬼人住たるを、源空上人四國ニ流罪になり給ひし比、御教化まし／＼て成佛を得させ給ひしと云傳ふ。其窟、村より五丁奥ニ有。又當寺ニ鬼の骨と云るもの有。百文ヅツに而開帳するなり。扱是より又海邊を行て四りにして

撫養

撫(撫)養湊

入口を土佐泊りと云。此邊り皆鹽濱にして繁華の地なり。商戸、漁擔薈を併て美々敷所なり。

岡崎 井 早崎 井 宮の浦 井 安

藝守

等一ツの湊をかこみて部落す。人家凡一萬貳三千軒と云傳ふ。此餘はし／＼に少しづ、の在家多し。從引田町四り。濱の方ニは船太(大)工并船針(釘)鍛冶。鹽燒濱。宮の浦邊ニ而は漁者多し。

岡崎邊には女郎屋多し。木津上、土佐泊り邊ニは問屋、商人多し。實ニ繁華の湊なり。扱是より船渡しを越て壹り斗行て

大毛村

人家十二三軒。撫養分也。
少しうらの山を上りて

龜大明神

此處より鳴戸眺望よろし。むかし鳴門より一箇の薈(遷)の上りたるを祭るよし。いつの比よりして龜の

いへるもの有。其外子玉の神社。其外臺村といへる山ニ夫婦瀧といへるもの有。女瀧幅二尺。高三丈位。男瀧幅三尺。高四丈斗。下ニ如意輪かんおんの堂有。また尼ヶ嶋といへる村ニは藤堂家の古城跡といへるもの有。海中五六丁ニ突出し、汐干る時は歩行に而行、滿れば船ニ而行事也。上ニ荒神の社有。其外家士の墓といへるもの數多有。また石垣、柵等のあ大海村、盛村、里村、井ノ口村、野々土〔江〕村、大原村 等皆五と今ニ巖然たり。また其大村を數ふ時は 波方嶋 へ渡るによろしく、是大島 へ渡る。此島また三餘の村にし而隨分富有なり。さして此卷ニ因も 波方嶋 へ渡るによろしく、是大島 へ渡る。此島また三無ればしるさず。また是よりして十丁をして 波方嶋 へ渡るによろしく、是大島 へ渡る。此島また三十七ヶ村。何れも富有なり。此嶋ニも 波方嶋 へ渡るによろしく、是大島 へ渡る。此島また三笹山の古城跡と云もの有ども略しぬ。より今治へ歸るニよろし。

- (註1) 鹿持雅澄。徳川末期の國學者。歌人。「万葉集古義」其他多し。安政五年八月十九日歿。六十八歳。
 (註2) 紀貫之。平安朝前期の歌人。假名文による「土佐日記」に著名。
 (註3) 野中兼山。徳川初期の儒者。字良繼。民政に功多し。寛文三年十二月十五日歿。四十九歳。
 (註4) ささげ。豆科の一年草。さは食用とす。
 (註5) しやみ。梵語の音譯。出家して十戒を守り、具足戒を受けるまでの男女。
 (註6) とっこ。獨鈷杵。密教での煩惱を斷じ惡魔を拂う法具。銅または鐵製。
 (註7) 物言へば唇さむし秋の風。
 (註8) 鹽垢離。鹽で軀を淨める。

四國遍路道中雜誌 (卷之三)

五十瀬 松 浦 弘 著

越而 爪さき上り之山道行まゝ、こゝかしこに農家有。二王門、茶堂有。また門前ニ茶店。止宿するニよろし。

六十七番大興寺
讚州の札納め

六十七番小松尾山醫王院大興寺 從雲邊寺ニ貳り。讚州の札納め也。豐田郡小松尾寺村ニ有。本尊藥師如來。座像。御長六尺。脇土不動、毘沙門。御長四尺。大師之作也。

十二神は皆堪慶之作なりと。御長三尺。當山も大師建立なりと。境内 大師堂 并 鎮守社 等有。境内少しの山ニ靠り風景よろしき處也。

詠 うゑをきし小松(を)寺をながむれば 法のおしえの風ぞふきぬる

等を越而野道しばし下り、凡貳り斗と思ふ比ニ

普門寺

此邊り皆農 七寶山神照院普門寺 といへる眞言宗の寺に大師作の觀音の像有。また境内ニ天神の社有。此處ニ菅公御流罪之時上らせ給ひしと云傳ふ。庭中

ニ高サ五丈、東枝廿五間、西枝十五間、南北廿三間の松の木有。頗る希代の名物也。街道より少しの廻りま

た十丁
斗行て
觀音寺町
人家千軒斗。商家、漁檐、農人等入接り。町の東ニ大川有。此川口ニ五六百石已下之船は皆漕懸りするが故に、市中大ニ繁華をなせり。町より東川有。從小松尾寺ニ貳り半。

六十八番琴彈八幡宮

六十八番琴彈八幡宮

祭神應神天皇并二仲哀天皇、神功皇后等なりと。相殿ニは住吉大明神、武内宿禰を祭る。本地阿陀(彌)陀如來は大師之御作也と。境内次ニ圖するがごとく海濱ニ

突出たる小山にし而、松は皆磯馴、其梢を越而四方を眺れば、南は阿豫、土州の山々波濤のごとく、西は安藝、伊豫之嶋山、北ニは三備、東ニ播磨灘を一望し、岸ニ打よする波は白雪を□まんが如く、實ニ風景云んかたなく、寺の因縁を聞に人皇四十二代文武天皇之比、大寶三年三月廿一日日澄上人九州豊前の字佐の里より、八幡宮を京都ニ勸請有て京都へ上るさ、此處ニ船をよせ給ひしかば虚空ニ琴の音有而、異香頻りニ薰じければ、此所ぞ則神の垂跡し給へん地かと一字を建給ひしと(か)や云傳えけり。

詠
舟〔笛〕の音も松吹風も琴の音も

歌ふも舞ふも法のこえぐ

寶前より壹丁斗下り左りの方ニ標石有。下ること貳丁にして

六十九番觀音寺

六十九番七寶山神盧〔惠〕院觀音寺

從ニ琴彈ニ丁。本尊正(聖)觀音。座像ニ而御長二尺五寸。四天王共ニ大師之御作也と。然し開山ハ日澄上人なりと。又因縁書ニ平城天

皇の御宇、足利義持公の祈願なりとも云えり。惣而此寺は琴彈八まんの別當ニ而昔しより有しと思わる。境
内圖するごとし。

五大力菩薩	并	新四國堂	并	大師堂	并	訶利帝母	并	地藏堂	并	太子堂	并	開山堂
-------	---	------	---	-----	---	------	---	-----	---	-----	---	-----

本堂の傍ニ

五大菩薩 并 新四國堂 并 大師堂 并 訶利帝母 并 地藏堂 并 太子堂 并 開山堂

合而彌勒菩薩、毘沙門天
を安置す。少し上の方ニ

藥師堂 而并 芭蕉翁早苗塚 而并 經塔 而并 五社 而并 蟬丸社 等有 茶堂等有。石階を下

り
二王門 出而
左り 稻荷社 并
而 金毘羅 并
て 天神社 并
寺。惣門出而 并ニ寺坊四ヶ
地藏堂
前ニ茶店有
止宿するニ吉。

詠
觀音の大悲の力つよければ

おもきつみをもひきあげてたえへべ

出而田道三丁程

生木の不動

出而田道三丁程
 行而道の傍に
 生木の不動
 といへるもの有。此佛像古來より此處ニ大なる楠有しが、去天保六年二月十七日夜誰ともしれず不動の尊像を半ニ彫たりしと。其よりし而皆參詣をなせるよし。少しの庵寺を建而幟等懸而病者等立願せるよしニ見えたり。何れも浮屠氏の作とミえたり。農道し
 ばし行。

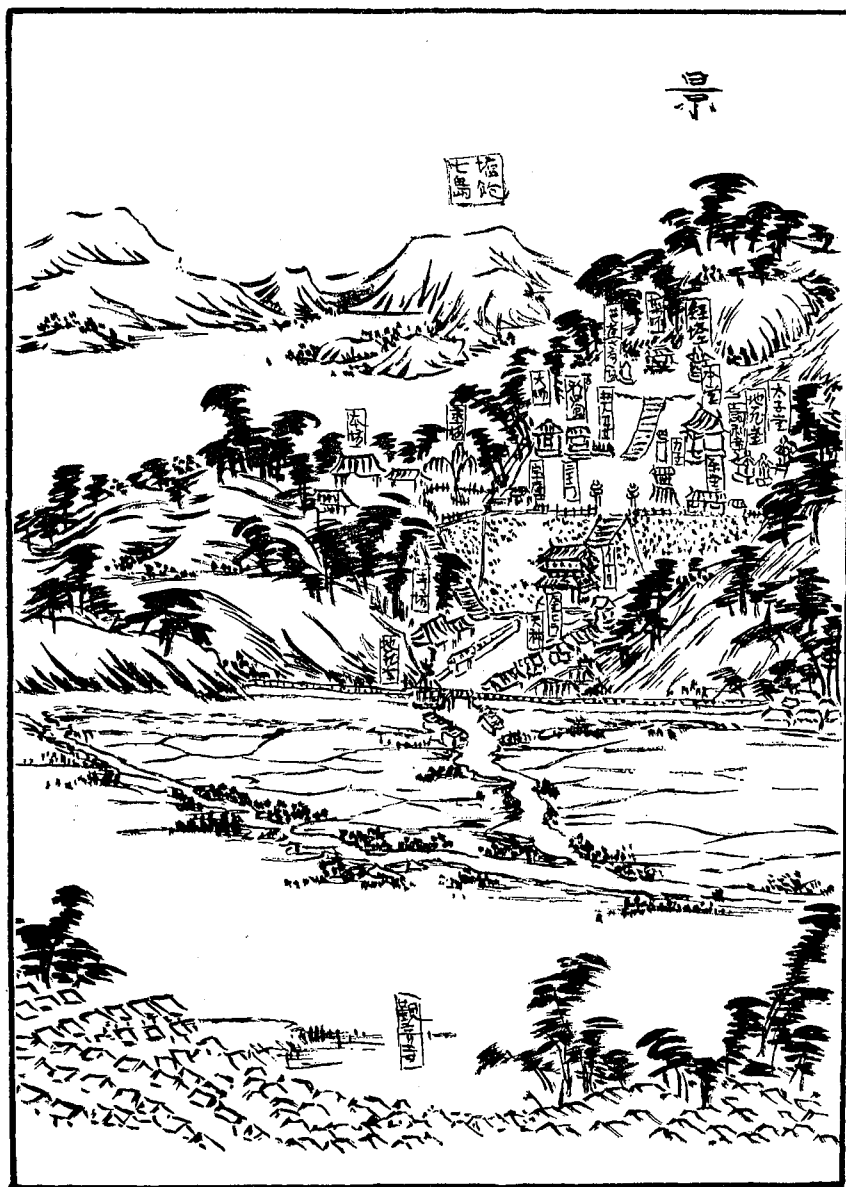
越 流岡村
過而道より左り之
不動瀧
といへるもの有
中買戸斗 高三丈
吉岡村
茶店有

止宿するニよろし。二王門入而茶堂有。

七十番本山寺

七十番七寶山寶持〔持寶〕院本山寺

從三十九番一壹り。本尊馬頭觀音。御長二尺五寸。彌陀藥師を脇土とせり。境内に大師堂并庚申堂に并





琴彈八幡之圖

備後



鎮守社 并 大塔跡 等
有。

詠 本山に誰かうへける花なれや

春こそたれを「手折れ」たむけこ「に」ぞなる

寶塔

打ぬけし
ばし行而

上寺村 行而

伊勢林村 并

笠岡村 越
勝間村 而

と云ニ到りて、道より右の方半丁斗田の中圖
することき寶塔有。土俗の云に、越後の國八

百比丘尼が建しもの也と云傳ふ
也。また其脇ニ大師の御作とて

鞍蓮華地
と云もの有。只臺座のミ残れり。其形
ち鞍のごときもの也。しばらく行而

新明村 村ツギ
しばし行

大見

村 ニ到る。山ニかゝり茶店壹軒有。是
より坂道を上ること七八丁にして

大門舊跡 傍ニ茶店有。此處ニ石橋有。是より右へ行ば萬「曼」陀
羅寺へ行也。小川有。流れ到而きよし。制札を建たり。

穴藥師堂 越
而 二王門

右の方岩面ニ五輪の形を彫ミ、
左り之方六字名號石有。過而

灌頂川 小き流れ也。法雲橋
とて橋を懸たり。越 獨鈷坊跡 上の
大師

手掛石

大五輪石。
并而上に

大日尊 上り
茶堂 左り

方丈 并
寶庫 方

洞藥師 上
洞地藏 并

西院舊跡

大師求聞持修行
窟

上 納經穴 上
に 奥院大師求聞持修行窟

此處に而大師護摩修行有しとて、參
詣之人數皆爰に而守りを頂く。并而

洞五輪 下り
而 中ノ院 上

多寶塔 下
三十三番觀音堂 并

十王堂、鐘樓 上
祖谷坊跡 上

瓶石

前ニ小川。水谷
と云有。是上り

護摩窟 此處に而護摩を修行
し給ひしとぞ。并て

天神社 東
比丘尼谷 に

東院舊地 上
權現社 上

骨納所

并 水祭 上
辯天社 下

加持水瀧 并
六本杉 上

降劍所 此處へ五柄の劍下り
し處なりと。下ニ

籠堂 向
而

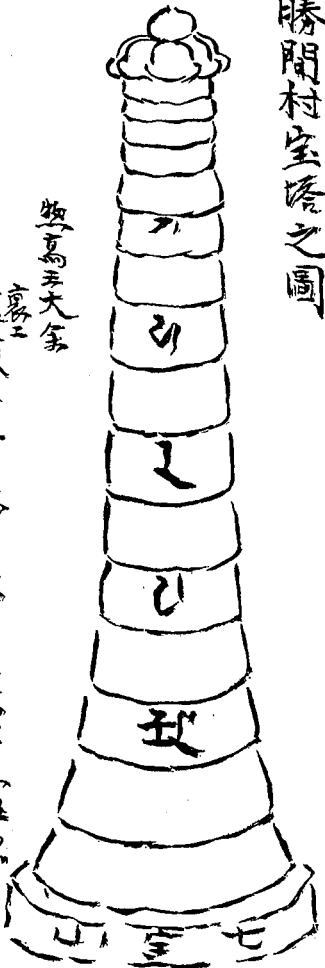
七十一番彌谷寺

七十一番劍五山千手院彌谷寺

從ニ七十番三三。境内岩壁多くし而嶮峻たる山形也。其西ニ皆佛菩薩之
像并ニ梵字また觀經之文等を彫り、頗る奇絶也。また山中ニ天霧山とて

香川信景の城跡有。此山の東の尾也。并ニ下戰場等有。また山内に山崎志摩祖母石塔有。同□家石塔。大宮
四郎右衛門并香川家代々之墓等有。

勝間村宝塔之圖



飯高太夫

天和二年三月六日とあるが、その年が明和二年とある。



劍五山彌谷寺圖



詠
惡人
と
行
つ
れ
な
ん
も
い
や
谷
寺

二王門迄下りて天霧

ひとの村
而 越

七十二番曼陀羅寺

七十二番我拜師山延命院漫〔曼〕陀羅寺

從彌谷寺一り。道すじよろし。本尊大日如來。坐像。御長二尺五寸。大師の御作也。此寺は大師善通寺を建立まし

而後ニ立給ひしとかや。境内に茶堂。止宿するニよろし。門前また茶店有。

并 鎮守社 前 西行上人寓居の舊地に 并 獨松 并 笠かけ櫻 西行笠をかけ給ひしよし。并ニ 不老の松 等有。其外

古墳并ニ小堂、小祠多し。然れども審ニせざれば略しぬ。

詠
わづかにもまんだらをがむ人はたゞ

再び三度かへらざらまし

また此寺より少

水莖の岡

また此寺より少し北ニ當り而
水菰の岡
といへる處有。爲家卿の歌に
水菰の岡の湊の浪よりや筆の海てふ名には立
らん 聞まゝしるす。また寺より打ぬけに上の方三丁斗坂を登り、東を眺望セ
ば白方、屏風が浦、多度津、丸龜等見ゆる也。上りて茶堂并茶店等有。止宿するニよろし。

七十三番出釋迦
寺
大師傳說

七十三番我拜師山出釋迦寺

從_レ萬_{〔曼〕}だら寺三丁。此寺は萬だら寺の奥の院なりと云傳ふ也。故ニ山號同じ。また院號もなし。此上なる山を我拜師山と號るは、大師禪定始め

の時此所より飛給ふニ女出而とめ給ひしが、後釋迦如來此處ニ現じ給ひしと。故ニ我拜師山大師堂并鎮出釋迦寺之號有。又上の山を捨身が嶽とも號る也。本尊釋迦如來。大師之作也。また境内に

守社
等

まよひぬる六道衆生すくはんと

たつとき山に出る釋迦寺

又坂道少し下

廣田村

又坂道少し下
りてしばし行
る。廣田村
を越へしばし行而、門前茶店并
商人屋有。止宿するニよろし。

七十四番甲山寺

七十四番醫王山多寶院甲山寺

從_ニ出釋迦寺_一三十丁。本尊藥師如來。座像。御長二尺五寸。大師の御作也。境内に

大師堂 并 毘沙門天堂 に

其外堂塔有。境內茶堂并ニしゆるう堂有。

十二神ミかたにもてるいくさには

おのれと心かう〔ぶ〕と山哉

また是より少

仙遊ヶ原

と云有。大師御幼童の節御遊
び給ひし舊跡なりと。傍に
犬塚
大師飼給ひし犬の塚な
りと傳ふ。すこし傍ニ
寶塔
後宇多帝、龜
山帝、後嵯峨

帝の爲ニ營ミし者と見ゆ。また此處より多度津の方へ凡壹り斗出而

大師誕生所
善通寺町

屏風浦 有。と云。白方村 是に 海岸寺 略しぬ。是へ行而打ぬけニ行時は十二丁にし而 善通寺町 出

る。商家三百餘軒。農家また入接りにし春秋二季ニ戲演有。頗る繁榮の地也。先大門東の方よりの順路をし

るやぶ 小川ニ懸たり。六地藏堂 右之 東荒神 大楠 法心橋 下馬 東門 入而右 天満宮 并 芝居

小屋 西 善女龍王社 前 輪藏 并 勸進所 又東門より入 常行堂 并 鼓樓跡 并 五重塔 西 鐘樓 南

五社明神 大楠四五株 南大門の跡 有。此より直道は南の方 有。此處ニ 金毘羅街道也。正面ニ

七十五番善通寺

七十五番五岳山誕生院善通寺

從三山寺三十丁。多度郡也。金堂本尊藥師 如來。座像。御長四丈(尺)五寸。大師之御作也。

五岳山

屏風が浦

此寺五岳山と云は、此西なる山色香(香色)山、我拜師山、筆山、火上山、中山、右五ツの山ニよりて號る なるべし。善通寺は御父佐伯善通之名をとり給ふよし。院號は則此地ニ而誕生ましませしかば號る也。古し えの古跡、屋敷跡等皆門前ニ連れり。また屏風が浦と號ることは、則うしろの五岳海ニうつりて其かたち曲 て屏風を建しさまニ比えしもの也。實ニ海内無比の靈地也とぞ。其南ニは普賢の象頭山、北ニは文殊の獅子 が山、中ニ有るは則出釋迦峯にし而、實ニ釋迦三尊の靈地なりとて大師、天竺八塔の工をとり寄せ給ひて伽 藍を建給ひし也。故ニ法然上人も如何なる童俗男女も一度此地を踏もの有ば、我も淨土の友なるよしを説置

れりとかや。

大師の俗性

扱又因ニ大師の俗性を聊しるさば、景行天皇稻背入彦尊之後、阿良津別命の後父は佐伯善通也。母は從五 位下阿刀大足卿の女也。母之御年三十一歳の御時、我姿を池ニうつし晝き給ひ母ニ奉り、入唐し給ひしとか や。前讃岐大守藤原賀能卿と大同元年同に歸朝し給ひ、其後藤原の藤嗣と眞言宗の奥義を弘め給ふ。其翌年 大同二年より弘仁四年迄かゝり而建立有しとかや。聞まゝをこゝにしるし置もの也。また南大門の前ニも

南荒神 其より少し 西行庵 といへるも 久の松 玉の井 等有る也。また金 堂より西へ行ば左 觀音堂 云。右の方

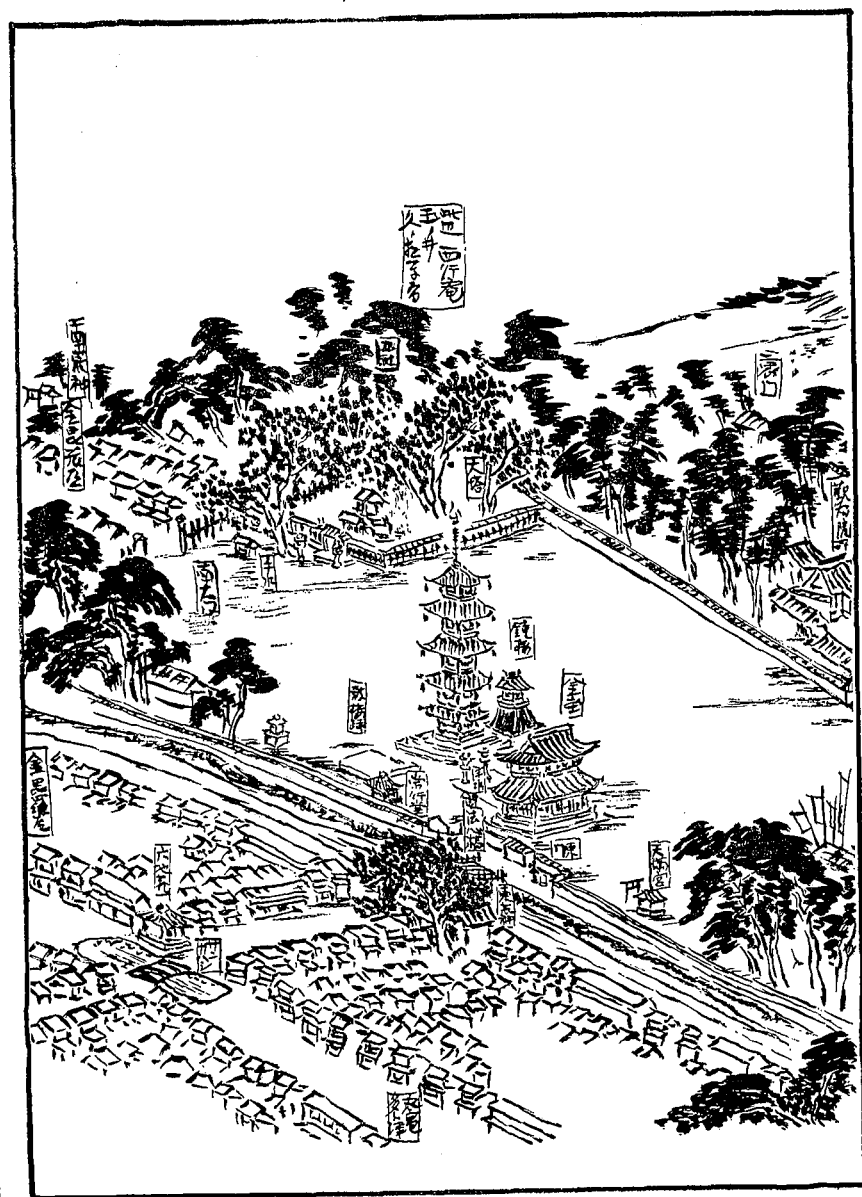
華藏坊 并 院圭防(坊) 并 藥師堂 此處より北への方少 北荒神 等也。また藥師 堂より西ニ行ば

はつか橋 左 御成門 常ニ鎖し置 二王門 入而左 御影池 大師此池ニ姿をうつし給ひ 鐘樓 并

茶堂 向 而

大師堂 則三拾壹才の時之御影なりとか 歡喜天 并 庚申堂 并 護摩堂 等。少しう 十王堂 并 親鸞

上(聖)人舊跡 堂有。聖人の像を安置す 西荒神 又是より三四丁うしろより 爪先上りニ壹り斗上り而



香色山八幡宮

本社は、仲哀、神功、應神天皇之三帝を
祭り、左右ニ大師之双親を祭崇する也。

詠 われすまばよもきえはてじぜんつう寺

深き誓の法のともし火

筆山

また 遊月亭 と云亭有。香色 筆山 と云有。古歌有。因ニしるし置に、筆山ニかきのぼりてもこへる哉
下ニ 山ニ併(井)而 筆山 苔の下なる巖のけしきを。聞まニしるし置。また此山中ニ四國八

十八ヶ所の石像有る也。是より山隙(隙)つたひに金毘羅へ五十丁。道よろし。また次ニ行にも道すじよろ
し。しばし行

七十六番金倉寺
智證大師

七十六番鶏足山寶鐘(幢)院金倉(倉)寺

從ニ七十五番ニ二十丁。本尊藥師如來。御長一尺八寸。坐像也。

本尊を自ら刻彫而安置せしとかや。以前は天台の道場なりしが、いつとなく眞言ニ變ぜしとかや。また三井
寺よりも前ニ大師建立ましませしよし也。則智證大師は弘法大師の甥ニ當るよし聞侍りける。如何なること
なりけるや。また寺を通善寺とも云るよ 大師堂 井 訶利帝母出現の地 とて社有。 鎮守社 其外ニ小祠、
し也。境内ニ萩多し。風景妙也。また 大師堂 ニ 井而 鎮守社 小堂有る也。
詠 まことにも佛法僧をひらくれば

眞言加持の不思議なりけり

扱打ぬけにして

桂村 越

へ至り門前ニ茶店有。止宿するニよろ

細道しばし行

桂村 而 加茂村

し。二王門入而茶所有。境内ひろし。

七十七番道隆寺

七十七番桑田山明王院道隆寺

從ニ金倉寺ニ壹り。多度郡加茂村ニ在る也。本尊は藥師如來。座像、御長
貳尺五寸。大師堂の木をもて小像を作り此腹中ニ納め給ひしとかや。其

後元明天皇の時といへども時代甚相違せり。

なれども苾芻の説まゝをしるし置ぬ。境内

大師堂 井 鎮守社 有なり。其餘小祠、
ニ 小堂等多し。

詠 願をば佛道際(隆)ニ入はてゝ

菩提の月を見まくほしさに

・打ぬけ是より丸龜へ半り餘ニし而道場寺へ行ニよろし。則初卷に道場寺のことはくわしく書たれば、此處
にて筆を留むるものなり。然れど 中津村 川有。歩行渡り。洪 鹽合村 此村ニ淨土宗之 權堀光明庵 等
も丸龜までの道をしるすニ、出而 水の節は船渡し有。 御堂有。過而
ことは前ニしるす故しるさ 丸龜 へ到り
ず。しばし畑道を過てより 丸龜 ぬる也。

丸龜

らが禿筆ニしるすも恐多けれ共、是も兎に角其靈驗を感じるの多きまゝしるし、一度流覽し給ふ
人ニも一蓮託生と希ことしかり。

附 錄

金毘羅町

金毘羅町

を西ニ出て谷川ニ添て行こと凡四り半斗の間は、兩岸小村多く農家樵戸たえま 有。是
なく打ツゞて住り。是より坂を上ること壹り斗にし而峠ニ致(到)り、こゝに 標柱 阿州三

好郡、讃州那加郡之境なるべし。此處より西北を望めば谷間傳ひに讃州を見、東南を見る時は阿州三好郡を眺望し、吉野川白波を湛えて其美しいわんかたなし。此川の向には劔山、祖谷、市中の山々波濤を捲來るがごとく、其奇中々紙筆につくしがたし。此峠づたひ半り斗行て人家こゝかしこを隣となして住り。是を

箸藏村

箸藏村

と云り。三好郡なり。人家二十餘軒。田少しもなく畑のミにし而侍(傍)ら木地を挽、また木履を作り、其平日之喰とする處は稗、栗(栗)、芋、甘藷、馬鈴芋、其餘櫃の實、櫛の木の實、七葉樹の實を谷川に瀑し用ゆ。其喰海内無比の惡喰とも云なるべし。然れども藍其外木地等ニ而產物多きが故に人家何れも富り。また其處に而耕出せる大麥は平日之喰にあてず。却而他邦ニ賣出す。是を以て其萬事を見るべし。又此邊りより市町ニ出ること賣もの買ものをするには皆讃州ニ出ること也。又此村より廿八丁下り吉野川の邊りニ至れば、皆土人半田市、別市へ出而賣出す。其持行品を見るに烟葉を多く持行けり。

又土人の常に服するものは麻に而織しもののミ也。土地麻を多く産すれども其品到而惡し。又男女の風俗は金毘羅の市ニ近きが故ニ到而風俗よろしく見ゆ。廿八丁坂を下り而川邊ニ到れば風俗又野鄙なり。扱村を行ことしばしにしてすぐに金毘羅山の奥院といへる

海内無比の惡喰

神護山箸藏寺

神護山箸藏寺

ニ到る。此寺近比焼失到(致)し而假堂なりしが、土地樹木多きが故に隨分大寺也。本堂本尊藥師如來。弘法大師御作にし而脇立并ニ十二神は後世添しものなりと。未だ焼失後なりしかば護摩堂并大師堂も皆本堂中ニ相殿とす。

扱此寺を金毘羅の奥院と云傳ふもの如何なるゆえんぞ。聊か因を聞ことなし。土人云傳ふ。讃州金毘羅之日々之御供ニ用る處の箸皆此寺の奥院崖ニ來るよし傳ふ。然れども其說如何にも審(訝)敷ぞ覺けり。又近年のことなりと。二月、三月、六月、十月十日、金毘羅の祭後十二日ニ此寺祭禮をなし而世間より參詣郡(群)集をなす。余も六月十日金毘羅の祭より十一日ニ此村ニ到り、止宿し而十二日ニ此寺ニ到りしが道俗郡(群)集したり。

十二禪定

寺より不淨除の守を出す。是を頭にはさみて本堂の前なる谷ニ添而下るニ、谷の流なる左右ニ石像の十二神有。是を拜するを十二禪定と號。下ること凡七八丁にし而谷ニ三丈斗の鐵鎖を懸たり。是にすがりて下ること又六七丁にし而

遙拜所

壹間ニ三間斗の小堂を懸厓の上に建懸たり。是よりして向方なる厓に有る五丈八尺の瀑布を拜す。此傍に樹木陰(隠)れに

箸藏谷窟

箸藏谷窟

有。是を拜す。則本尊は藏王權現なるよし。其景次に圖するがごとく陰森たる景中ニ紙筆ニつくすべきところにあらず。又此處に行こと一年中纔三月、六月、十月の十二日のミの三日を限る。寺にかえりて護摩供有。翌日下りて半田の方へ到る。九折廿八丁。嶋嶺中々筆狀すべきところにあらず。

半田町
煙草を諸國へ賣出す

扱是より吉野にそうて下ること四りにして半田町

三好郡ニ有。人家三百餘軒。商戸、農家入接、烟艸を多く刻諸國へうり出す也。土地田少し。畑多



箸藏谷之圖

し。麻、烟葉を多く産す。此處より并て少し上ニ

といへる處有。是より吉野川を渡り半
辻 斗坂道を上りて山の端道しばし行て

二到る。此處また山のこゝかしこに家居して田なく畑
斗也。人家は凡三四十軒斗も有やうニ思わる。是より

しばし谷ニ添て上り、道より下ニ

怒竈

といへる處有。此處兩岸より巨岩差出たる其かたち竈のごとき處に、上の方より落くる水此間ニ
入る。其音法螺の音のごとし。其兩岸緑樹陰森として其物寂しきこと云わんかたなし。また是よ

りして谷川添棧道又は懸厓を行こと凡二十丁斗にして

七段瀧

と云ニ到る。是また次ニ圖するごとし。其高數十丈の岩面ニ幅ハ壹丈餘。高凡十(六)餘なるが七
段ニなりて落るなり。故土人は是を七段瀧と云り。此壹丁斗も近き邊りニ行や沫泡衣を浸して甚

物寂しき處也。此瀧の下ニまた石有。此上を飛行ニ其上段は其影の上ニも落かゝるやうニ覺へて頗る物すこ
し。越而十五六丁斗にして

市中村

人家五六十軒。山のこゝかしこに人居す。田無畑斗にし而平日の喰は麥のミを用ゆ。又櫓の木、
櫃の木の實を多く水ニひたし置用ゆ。衣類は皆麻を用ゆ。此邊りニ南源内と申強力の人の家孫有

しとかや。谷ニ添て行こと二り斗。此間谷の兩岸ニこゝかしこ人家在。しばし行而より劔山の裏山ニ上るニ、
九折凡□百丁斗道無如き處又は嶮棧を行而

見殘シ といへる方ニ出る。此處龍堂一字有。 祖谷村 な 圓福寺 といへる寺より僧到りて相話、其十六
此處ニは六月十六日夜より十八日迄 日之夜は村々の先達共皆是ニ致(到)り

て、終夜念佛を唱えて相つむる也。又十八日過れば十九日ニは早々下る也。余は箸藏寺より辻村ニ出而、十



新之國



七段之瀧

五日猿飼村ニ止宿し十六日ニ此處に來り籠りたり。毎年ともニ漸此三日のミ參詣を免るし、其餘はかたく登山を禁ずる也。

祖谷山

祖谷山と云は美馬郡ニ有。則此劔山の西ニ當り豫州の境ニ當る。四國第一番の邊鄙也。余は此村ニは到らず。土俗の説を聞に、此村ニ安德天皇の潜幸ましませし舊蹟といへるもの有り。則此處ニ而文治二年正月元日ニ崩御ましませしと。然れども帝の崩御の日と世ニ傳ふは壽永四年三月廿四日と傳ふ也。又此邊りの舊家ニ帝の旗なりと云ものを一流持傳ふ。其旗ニ中ニ八まん大菩薩、左リニ嚴島大明神、右ニ上ニ字は不_レ分とも下ニ大明神の三字ほのかに見えたるものを傳えたり。然れども其色紅きこと少しも今は無しと云り。

又此邊リニ門脇宰相國盛卿の玄孫といへるものも有よし。是は則門脇中納言教盛卿の二男なりとぞ。又三好郡貞廣村ニ帝の陵なりしと云もの有。今は祠を建て若宮大明神と稱ふ。また幸の神とも稱ふ也。また祖谷山なる圓福寺は、古しえ神爾(墨)寺と號しとかや。近世圓福寺と改めしよし等申傳ふ。此寺之過去帳ニ神爾(墨)和尚と云名有しと云傳えしが、余は市中より直ニ見殘しニ上りしかば此寺を残せしぞ遺恨なりけり。

扱

是よりまた朝早く、恐らく未だ十七日の朝月夜かたぶきしばしと思ふ比より、皆飯喰または麥粉等を喰して、上ること三十丁斗の間は九折甚難儀なりしが、其より平山のやうニなりて道も大ニらくになりけれども、只壹ヶ年ニ只三日のミの事なれば、あるか無かの熊笹原をわけて行ニ、凡四十丁斗と思ふ比は樹木とても無、只熊笹のミにして四方の眺望もよろし。是を行こと半り斗にして此道すじを裏山と云也。



劍山表之圖



劔山大權現

本社小き石の祠也。祭所安徳天皇の御太刀を置と云傳ふ也。また是よりして南ニ少し隔りて小き谷を越

小劔山權現

の社有。此餘山中ニは八十五末社有と。其數、名

目先達に案内を乞へざれば一々しれがたしと。是よりまた少し山ニ上りて

十柄の權現

といへる社有。すこし下りて

一ノ森權現

并 二ノ森權現 十

花畑

二社權現

井 經 塚

帝、神爾寺ニいらせ給ひし時に法華八巻を書寫し給ひし。入水之軍卒一門の爲に此處ニ納め給ひしと云傳ふ。并而少しの谷のあなたに

花畑

といへる平地有。

此處には四時ともニさまぐの草花有と。別花

おしき水

といへる清水有。此水四時ともニ涌出る。參詣の人竹の筒を持行て皆是に入歸る也。疼痛等を

愁る人ニ驗多しと。

不動の窟

といへるもの有。入ること凡七八軒(間)。

鎖禪定

又下りてし

御手洗鉢

また少し行而

加靈山見ゆ
九十九ヶ處の瀧

等其外名所數十ヶ所有る也。又峯より西南を眺めば加靈山とて高山見ゆ。此山は土州境也と。是ニは九十九ヶ處の瀧有る由也。實ニ

希代の山なりとかや。

扱 是より下ること

表山別當龍光寺

是また六月十六日、十七日、十八日の三日のミこゝに來り、其餘は麓ニ下り而住する

也。眞言宗にし而弘法大師之開基なるよし。また此境内より東を望むに、燒山寺の山

佛飯をもりし如くニ見ゆる也。され(ど)も是より谷すじを下り行ば十貳り有りと聞り。是ニ而此國の廣きことと思ひしらる。

扱余は是よりまた猿飼村ニ歸るに、寺より本道を下りて寺より左り山ニ入而猿飼村ニ歸る。實ニ此行よき

折とは云ながらに、五月廿八日豫州石槌山に登り、六月十二日箸藏寺へ參詣致し、又此日劔山登ること實ニ佛縁とも云なるべし。然れども其おしむべきは祖谷山ニ入らざりしと伽靈山ニ行ざりしとは、如何ニも残念とぞ覺。其上此邊りを歩行し(之)時間たり、又は見たる景等を圖したる巻を、肥前平戸寓居の時に紛失到(致)せしが如何にも残念ニぞ覺けり。然れども其日記とすべき一卷ニよりて此度此三巻を綴て、又境内之圖等は石にこしかけ道傍ニ佇立し而圖せしを抄擧し而、此地ニゆかりを結ばざる道俗男女の爲にもとしるし置もの也。

大ぼけ

小ぼけ
琵琶ヶ瀧
かつら橋

又土人の云に、此祖谷山ニは祖谷の懸はしとて、大ぼけと申地ニ此向の山厓より彼向の斷崖ニ、一本の大木を渡し而往來する地等も有よし。其又麓には小ぼけと申て柴もて懸たる橋等も有よし。其餘琵琶ヶ瀧、井ニかつら橋と云有と。此かつら橋は數十丈深き谷の上に纔二條の藤かつらを引渡し、此かつらに木を二ツわりニし而其をこゝかしこと、壹尺間位に是を結つたりと。此邊り之人は柴を負薪を荷て此橋を渡るに何のつらさも無りしが、他村より行しものは中々此橋を渡ることをやう到(致)さざりし(と)かや。其邊の事を詠じたるに

邊りにはたえず平家のものがたり

いとおもしろき琵琶の□つせ

浪花 桃 苗

いや高く聞ゆる瀧の琵琶の音の

ほろ／＼雨にも水まさりてや

阿波 春 芳

見るからにわたるもいやのかつらばし

身もはいかゝる心地こそすれ

桃 苗

心なき雲こそわたれ鳥すらも

いゆきはぐかるミネのかけはし

權大僧都齋稱

等聞待るまゝしるし置もの也。

劔山の石楠木

また此劔山ニ石楠木多し。余等上りし比未だ山上は花の盛なりしが、其上紅を疊ミ頗る風景よろしく見えたりけり。餘ニは熊笹のミにし而嶺上ニは見ニ當るものなし。又四國の山々よく見え、石槌山もあれなりと指さし示さるゝに雲間ニ突出して頗る高くそびえたり。實ニ靈場と云ニもあまり有けり。またかゝる處まで平家、源氏ニ追はれて世を避しもまた感涙を催すのたねぞかし。

旅行手記

(中國路、九州路
の一部)